

令和7年度 愛知県障害者虐待防止・権利擁護研修

身体拘束の適正化において (演習)

社会福祉法人 くすの木福祉事業会
サポートくすの木施設長 村崎 正明

(令和7年度 虐待防止国研修修了者)

この時間で学ぶこと

- 身体拘束を実施している事例を通して、
 - ① 同意等の手続や身体拘束の3要件を確認する。
 - ② 行動制限の緩和や解除に向けての動きを理解する。

(1) 身体拘束等の適正化の体制整備

身体拘束はなぜ問題なのか？

- ① 障害の有無に関わらず全ての人には自分自身の意思で自由に行動し生活する権利があります。一方で、身体拘束とは、障害者の**意思にかかわらず、その人の身体的・物理的な自由を奪い、行動を抑制または制限し、障害者の能力や権利を奪うこと**につながりかねない行為です。
- ② 障害者虐待防止法では、「**正当な理由なく障害者の身体を拘束すること**」は身体的虐待にあたる行為とされています。身体拘束は、**関節の拘縮や、筋力や心肺機能等、身体能力の低下、褥瘡の発生等の身体的弊害、意思に反して行動を抑制されることによる不安や怒り、あきらめ、屈辱、苦痛といった精神的な弊害**をもたらします。
- ③ このことは**家族にも大きな精神的苦痛**となるとともに**モチベーションや支援技術の低下を招く等の悪循環**を引き起こすこととなります。そのため、身体拘束の廃止は、本人の尊厳を回復し、支援の質が低下する悪循環を止める、虐待防止において欠くことのできない取組といえます。
- ④ 障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく「**指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準**」等には、緊急やむを得ない場合を除き身体拘束等を行ってはならないとされています。

(1) 身体拘束等の適正化の体制整備

(身体拘束等をやむを得ず行う場合は、以下の**全てを満たすことが必要**)

- ① **切迫性**:利用者本人又は利用者等の生命、身体、権利が危険にさらされる危険性が著しく高いことが要件となります。
- ② **非代替性**:身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する方法がないことが要件となります。
- ③ **一時性**:身体拘束その他の行動制限が一時的であることが要件となります。

*さらに、やむを得ず身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録しなければならないとされています。

(1) 身体拘束等の適正化の体制整備

(やむを得ず身体拘束を行うときの手続き)

① 組織による決定と個別支援計画への記載

やむを得ず身体拘束を行うときには、個別支援会議等において組織として慎重に検討・決定する必要があります。この場合、管理者、サービス管理責任者、運営規程に基づいて選定されている虐待の防止に関する責任者等、支援方針について権限を持つ職員が出席していることが大切です。身体拘束を行う場合には、個別支援計画に身体拘束の態様及び時間、緊急やむを得ない理由を記載します。これは、会議によって身体拘束の原因となる状況の分析を徹底的に行い、身体拘束の解消に向けた取組方針や目標とする解消の時期等を統一した方針の下で決定していくために行うものです。ここでも、利用者個々人のニーズに応じた個別の支援を検討することが重要です。

② 本人・家族への十分な説明

身体拘束を行う場合には、これらの手続きの中で、適宜利用者本人や家族に十分に説明をし、了解を得ることが必要です。

③ 必要な事項の記録

身体拘束を行った場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由等必要な事項を記録します。

個別支援計画への記載例

落ち着いて過ごしたい	落ち着いて過ごせるよう、環境設定を行う + 評価	落ち着いて過ごしたい + 評価	[その他] ・ 座席の位置を配慮する（窓側にならないように） ・ 行動の前後を観察し、行動の背景を分析し、行動制限以外の方法を探る ・ 3要件（切迫性・非代替性・一時性）を満たす場合は行動制限を行う ・ 前に立ち体で止める、両手で抑えるなどを行い、本人や他の人に危険が及ばないよう配慮する サービス管理責任者 生活支援員	+ 評価
------------	-----------------------------	--------------------	---	------

個別支援計画に身体拘束の態様及び時間、緊急やむを得ない理由を記載します。これは、会議によって身体拘束の原因となる状況の分析を徹底的に行い、身体拘束の解消に向けて取組方針や目標とする解消の時期等を統一した方針の下で決定していくために行うものです。

身体拘束の3要件に該当しなくなったらすぐに解除

- 緊急やむを得ず身体拘束を行う場合であっても、「緊急やむを得ない場合」に該当するかどうかを常に観察し、再検討し、3要件に該当しなくなったら、直ちに拘束を解除します。
- この場合には、実際に身体拘束を一時的に解除して状態を観察するなどの対応をとることが重要とされています。

ロールプレイ 事例①「居室の施錠」

施設入所当初から不意に他者に手が出ていたYさん。職員が間に入ることでなんとなくやり過ごしていましたが、入所から5ヶ月ほど経過すると誰かがそばに来るだけで手や頭が出てしまい他害を防ぐことが困難になってきました。また、壁などへの頭突きを繰り返して怪我をしてしまうことも多くなりました。しかし、職員がそばにいることも苦手で、そのことからさらに課題行動を誘発させてしまいます。

そして、〇月〇日、他利用者に対しての他害行為を防げず怪我をさせるしまう事故が発生しました。勤務していた3人の職員はその場で話し合い、Yさんを居室に誘導して施錠しました。

その後、サービス管理責任者がケース会議を開き、当面の支援方針や行動制限について検討し、下記の方針としました。

- ①玄関前の居室へ引っ越す（本人の用スペースと他の利用者の居住空間の境目に木製のパーテーションを配置して環境を分離した）。
- ②壁や床に頭をぶつける自傷行為が顕著に見られたことから、本人用スペースの全ての壁や床に保護材として、クッションやジョイントマットを取り付けた。
- ③職員がユニットに入室する時に、他害行為や自傷行為が出やすいためYさんの居室とスタッフルームの間には段ボール箱を組み立てて緩衝材とした。
- ④利用者誘導や外部の方（清掃職員、医師の確認、見学者など）ユニットに入る際には、本人を居室へ誘導してパーテーションを立て、合わせて居室の施錠対応することとした。

行動制限の方針として、約1ヶ月間の期間で、施錠時間は1日で2時間程度と設定し、施錠時の記録をこまめに行うことを統一した。

ロールプレイ役割設定②

①家族に対して、どのような手順で、どのような内容を伝えるかグループで話し合う。(個人ワーク5分、グループワーク15分)

(どのような手順で、どのような内容を家族に伝えるか)

-
-
-
-
-

ロールプレイをやってみよう(15分)

- ① サービス管理責任者役、生活支援員役は身体拘束について説明をして、同意を得る。
- ② 家族役は、基本姿勢として身体拘束について同意しない。事業所側から説明を受けても質問を投げかけるなど、同意しない姿勢を通す。
- ③ 任意の参加者の管理者役はとにかく同意をしてもらわないと困るというスタンス。相談支援専門員役は利用者擁護の観点から他の方法がないか質問。

ロールプレイの感想を述べあう(10分)

- ① サービス管理責任者役、生活支援員役は家族への説明を実施して、難しく感じたこと、もっと工夫すべき点等の意見を述べる。
- ② 家族役は事業所側からの説明を受けての感想、また、家族として説明を受けた際の心情などについて意見を述べる。

ロールプレイを通して、身体拘束を許容する 考え方を問い直そう

- 身体拘束は行う理由として、障害者の家族の同意により許容されるという意見があります。確かに、家族が事業所側の説明を聞き、身体拘束に同意する場合がほとんどだと思えます。しかし、その**同意は家族にとって、他に方法のないやむを得ない選択であったこと、そして縛られている場面を見て、家族は混乱し、苦悩していることを、我々福祉事業所職員は真剣に受け止めなければなりません。**
- 家族への説明内容は十分に検討し、誰がどのように説明するかなどの準備と日頃からの家族との関係性作りが重要です。

(2) 具体的な身体拘束ごとの工夫のポイント

- ①徘徊しないように、車いす、ベットに体幹や四肢等をひもで縛る
(徘徊中に転倒し、骨折やケガの恐れあり)

身体拘束をしない工夫を考えてみよう

(個人ワーク 3分)

(グループワーク 5分)

(2) 具体的な身体拘束ごとの工夫のポイント

②脱衣やおむつはずしを制限するために、介護服(つなぎ服)を着ける

身体拘束をしない工夫を考えてみよう

(個人ワーク 3分)

(グループワーク 5分)

(2) 具体的な身体拘束ごとの工夫のポイント

③ 集団活動中にイライラして隣の人を叩くことが頻繁にあるので、他者を叩こうとしたら手を押さえ、複数人で手を引いたり体を押したりして部屋の外に出てもらおう。

身体拘束をしない工夫を考えてみよう

(個人ワーク 3分)

(グループワーク 5分)

身体拘束をせずにケアを行うためにー3つの原則

「身体拘束ゼロの手引き」を参考に

1. 身体拘束を誘発する原因を探り除去する

身体拘束をやむを得ず行う理由として、次のような状況を防止するために「必要」と言われることがある。

- 徘徊や興奮状態での周囲への迷惑行為
- 転倒のおそれのある不安定な歩行や点滴の除去などの危険行為な行動
- かきむしりや体をたたき続けるなどの自傷行為
- 姿勢の崩れ、体位保持が困難であること

しかし、それらの状況には必ずその人なりの理由や原因があり、支援する側の関わり方や環境に問題があることも少なくない。したがって、その人なりの理由や原因を徹底的に探り、除去する支援が必要であり、そうすれば身体拘束を行う必要もなくなるのである。

身体拘束をせずにケアを行うためにー3つの原則

「身体拘束ゼロの手引き」を参考に

2. 5つの基本的ケアを徹底する

そのためには、まず、基本的な支援を十分に行い、生活のリズムを整えることが重要である。①起きる、②食べる、③排せつする、④清潔にする、⑤活動する（アクティビティ）という5つの基本的事項について、その人にあった十分なケアを徹底することである。

例えば、「③排せつする」ことについて、ア.自分で排せつできる、イ.声かけ、見守りがあれば排せつできる、ウ.尿意、便意はあるが、部分的な介助が必要、エ.ほとんど自分で排せつできないといった基本的な状態と、その他の状態アセスメントを行いつつ、それを基に個人ごとの適切な支援を検討する。

身体拘束をせずにケアを行うためにー3つの原則

「身体拘束ゼロの手引き」を参考に

3. 身体拘束廃止をきっかけに「よりよい支援」の実現を

- 身体拘束の廃止を実現していく取り組みは、福祉事業所における支援全体の向上や生活環境の改善のきっかけとなりうる。
- 「身体拘束廃止」を最終ゴールとせず、身体拘束を廃止していく過程で提起された様々な課題を真摯に受け止め、よりよい支援の実現に取り組んでいくことが期待される。

冰山モデルで

身体拘束を減らしていく視点

水面上 ⇒
水面

行動

身体拘束が必要な状況
(切迫性/非代替え性/一時性)

水面下 ⇒ 行動が起きる理由

身体拘束になる理由・背景

感覚過敏や感覚鈍麻、拘りの強さ、変化の弱さ
コミュニケーションの難しさ、過去の経験や学習...理解し考える

【理解が深まれば、水の透明度も上がる】

施設・職員として

職場環境と自己覚知

＜チームとして支援をする意識、情報の共有しやすい職場環境＞

- ・学習（研修・講習）する機会がある。
- ・相談しやすい関係性がある。
- ・指摘し合える関係性がある。
- ・評価し合える関係性がある。
- ・支え合える関係性がある。
- ・上司が個々の考え方や価値観を受け止めてくれる姿勢がある。

＜自己覚知（職員各々が自分を知る）＞

- ・ストレスを抱え込まない（ストレスチェック）
- ・感情のコントロール（アンガーマネジメント）
- ・体調管理（倦怠感、寝不足等のチェック）

【風通しの良い職場環境と職員の心身の健康】

◎身体拘束は何故していけないのかを理解し支援にあたる。

⇒権利侵害、身体的・精神的弊害、家族の精神的苦痛、モチベーションや支援技術の低下

◎身体拘束3要件すべてを満たしているか常に確認する。

⇒身体拘束適正委員会、個別支援計画、支援記録

◎同意書を取る場合、支援の根拠を十分に説明すること。

⇒家族の心情にも配慮

◎身体拘束を行わなければならない状況に至る前の支援について考えておく。

⇒そこまでに至る理由や背景を理解し、利用者にとっての環境改善等、工夫・改善を繰り返す

【私たちは利用者の権利を守る人生の伴走者】